口頭発表Ｃ⑤

学生による徳大生の正課外活動支援
—真剣徳大しゃべり場の企画・開催を通して—

浦邊研太郎[1)]、光宗 榮[2)]、福島沙奈[3)]、吉田 博[4)]
１）徳島大学工学部電気電子工学科２年　２）徳島大学総合科学部社会創生学科１年
３）徳島大学総合科学部人間文化学科１年　４）徳島大学大学開放実践センター

１．はじめに

近年、我が国の高等教育において、学生支援という言葉が定着してきたといえる。日本学生支援機構は、ユニバーサル段階を迎えた高等教育の中では、大学等においていかに学生支援に取り組むのか、あるいは学生支援の取り組みにより、いかに学生生活に教育的インパクトを与えるのか、学生支援の位置づけがますます重要性を帯びていると指摘している[(1)]。さらに、佐藤（2007）は、現代の大学において、正課活動の重要性を指摘しつつも、正課外活動が必要であり、その重要性が高まっていると述べている[(2)]。このような背景のもと全国の大学では、修学支援、キャリア支援などのさまざまな学生支援が行われている。また、学生支援を大学がいかに行うかといった議論が存在している中で、学生自らの手で、学生支援を行う取り組みがいくつか存在する。その一つの例として、愛媛大学のスチューデント・キャンパス・ボランティア[(3)]が知られている。さらに、このような学生の学生支援活動に関する研究も行われるようになった[(4)]。西本（2009）にあるように、今や学生を学生支援の支援行為の主体として位置づける学生支援が注目を集めている[(5)]。

２．正課外活動支援のきっかけと本発表の目的

2010 年 8 月、学生支援に取り組む学生を対象としたワークショップが、2 つ開催された。これらのワークショップの目的は、レクチャーとワークを通して、正課外活動、学生支援、ＦＤ活動などを学習し、学生が主体的に「学生中心の大学」づくりを進める活動を支援することである。一つは、8 月 27 日に愛媛大学において開催された「四国キャンパス元気プロジェクト」[(6)]で、もう一つは、8 月 28、29 日に立命館大学において開催された「学生ＦＤサミット・2010 夏」[(7)]である。筆者らは「四国キャンパス元気プロジェクト」に参加し、さらに光宗、福島は「学生ＦＤサミット・2010 夏」に参加した。これらに参加した学生は、学生支援の必要性や自らが主体的に学生支援に取り組みたいという積極性を身に付けた。

このプロジェクトに参加した学生は、「四国キャンパス元気プロジェクト」のワークの中で作成した企画を、徳島大学において実現したいという思いで集まり、2010 年 11 月 11 日に「真剣徳大しゃべり場」（以下しゃべり場）を企画・開催した。本発表は、しゃべり場での議論の様子を紹介するとともに、しゃべり場が徳島大学の学生、教員にどのような影響をもたらすことができたのか、考察を行う。

３．真剣徳大しゃべり場とは

しゃべり場の目的は、学生・教員が、大学の可能性について自由に意見を交わし、徳島大学での学びについて再認識してもらうことである。参加者は、10 人前後のグループに分かれ、各グループにはコーディネーター（進行役）の学生を１人ずつ配置し、テーマに沿って話を進めた。今回のしゃべり場で扱ったテーマは、次の 4 つである。

① 楽しかった授業、楽しみな授業
② 授業の選び方、選ぶ基準
③ 今、授業以外で打ち込んでいること、やってみたいと思うこと
④（徳島大学で）あなたは何がしたいですか？

また、グループに分かれての議論終了後には、飲み物とお菓子を用意し、参加者同士の親睦を深めるフリートーキングの時間を設けた。

４．真剣徳大しゃべり場の様子

しゃべり場には学生 22 名（主催学生含む）、教員 6 名の 28 名が参加した。総合司会の浦邊による挨拶・企画の主旨説明などが行われたのち、参加者は約 9 名ずつ 3 グループに分かれて議論を開始した。はじめはコーディネーターが話を振るなどして学生からの意見を求めていたが、次第に学生からの積極的な発言が見られるようになった。議論の中心は主に授業についてであったが、学生が普段感じていることを発言したり、中にはシラバスの改善点を列挙する学生がいたりするなど、各グループともに白熱した議論が行われた。また、フリートーキングの時間には、参加者間の積極的な交流を実現することができ、参加者にとって有意義な時間となったことが伺える（図１）。

図１「真剣徳大しゃべり場」の様子

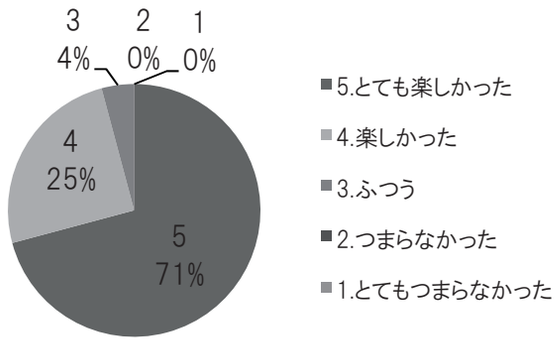

図２　「真剣徳大しゃべり場」に参加して、楽しかったですか？

５．考察

しゃべり場では参加者アンケートを実施し、参加者のうち、企画者を除く 24 名から回答を得た。このアンケートでは「『真剣徳大しゃべり場』に参加して、楽しかったですか？」という設問（5 件法）に対して、7 割以上の参加者が「とても楽しかった」と回答している。「楽しかった」と合わせると 9 割を超えている（図２）。また、アンケートの自由記述において、良かった点として「学生同士で活発な意見交換ができた」「教員と話す機会が得られた」等の意見が多く、しゃべり場が学生と学生・学生と教員の活発なコミュニケーションの場として機能していることがわかる。それに伴って、「前向きな意見が聞けて、刺激になった」「モチベーションが上がった」という意見も見られる。このように、しゃべり場に参加することが学生の主体性の向上につながっていることがみうけられる。一方で、今後改善すべき点として、実施時間の短さや、テーマ数の多さ、広報活動の不足などが挙げられた。また、学部・学科を超えたコミュニケーションの実現を目指す点から見ると、参加者が総合科学部の学生に偏っていたことも改善すべきであろう。これらの改善点を次回以降に修正し、より良いしゃべり場を作り上げなければならない。

６．参考文献・資料

（１）藤江陽子（2010）学生支援の現状と課題．独立行政法人日本学生支援機構学生生活部，大学等における学生支援取組状況調査研究プロジェクトチーム中間報告書：7-10

（２）佐藤龍子（2007）学生の自発性を促すキャリア教育と正課外活動．京都大学高等教育研究，13：25-34

（３）愛媛大学スチューデント・キャンパス・ボランティア 公式サイト
http://www.ehime-u.ac.jp/SCV/（2010.11.30）

（４）杉村和美他（2006）ペア相談と学生の主体性を取り入れた大学でのピア・サポート活動．青年心理学研究，18：51-62

（５）西本佳代（2009）学生による学生支援活動における課題．香川大学教育研究，6：63 － 73

（６）西本佳代（2010）正課外活動支援で学生中心の大学を．SPOD フォーラム 2010 プログラム集：28

（７）学生ＦＤサミット・2010 夏 Web サイト
http://www.ritsumei.ac.jp/acd/ac/itl/itl_fd/summit/2010natsu.html（2010.11.30）